

倫風宏話

実践と幸福

上 廣 榮 治
うえ ひろ えい じ

「人間が幸福に明るい生活のできる道」
それが実践倫理である。これは今から半世紀前に刊行された、
先師の著書『明るい生活』の序文に明記されている、私たちが会友の目指すところです。

わが会は創立当初から今にいたるまで、この道を広く社会に普及しようとしてまいりました。そして
て明年、創立六十周年を期して、さらにその活動を深化させ活発化させていこうとしています。

では、ここに語られている「幸福」とは、どのようなことを指し示しているのでしょうか。古今の賢人た
ちの格言を引きながら、私なりに思うところをまとめておきたいと思います。

まず、幸福であるためには、どうしても実現されていなければならないことがあります。それは「欠乏か
らの自由」ということです。まず健康です。健康を欠いて幸福はありません。また、衣食住が足りることも
幸福であるための前提でしょう。そこで、こんな格言があります。

「幸福はまず何よりも健康の中にある」(米ジャーナリスト G・W・カーチス)

しかし、健康や衣食住の充足は幸福の必要条件ではあっても、十分条件ではありません。丈夫な体を持ち、

衣食足りても、何もすることがなければ幸福ではありません。

「幸せは、樂をし、物質的に苦勞しないという環境から与えられるものではない。自分の人生に充実感、生き甲斐を見つけることだ」(社会福祉家 渡辺五郎三郎)

「一生の仕事を見出した人は、ほかの幸福を探す必要はない」(英歴史家 トーマス・カーライル)

もちろん、ただ懸命に働けばよいというものではありません。働くことに、人として生まれてきた喜びや生き甲斐を感じてこそ、はじめて幸福であるといえるのです。

「喜んで行ない、そして行なったことを喜べる人は幸福である」(独作家 J・W・ゲーテ)

「自分の仕事を愛し、その日の仕事を成し遂げて満足する。そんな軽やかな気持ちで夕餉ゆうぐのテーブルにすることが出来る人が、世の中で最も幸福な人なのだ」(米百貨店主 ジョン・ワナメーカー)

そうです。たとえ平凡な仕事であっても、働くを喜び、成就を喜ぶことができれば、人は幸福になることができます。では、働いた結果、何事かが成就せず、失敗に終われば不幸なのでしょうか。違います。働く喜びとは、人としての生き甲斐を果たそうと懸命に努めること、それ自体なのです。

「コロンブスが幸福だったのは、アメリカ大陸を発見したときではない。彼がそれを発見しつつあったときに幸福だったのだ」(露作家 F・M・ドストエフスキー)

幸福は努力の結果の成否にあるのではなく、いま行ないつつあることの中にある。つまり、「今日一日」の実践のうちにあるのです。しかし、それにも条件があります。何を行なうかが問題です。

「幸福の秘訣は、自分がやりたいことをするのではなく、自分がやらなければならぬことを好きになることだ」(『ピーター・パン』の作者 ジェームズ・M・バリー)

自分がやりたいことをする。自分が好きなことをする。たしかにそれは楽しいことです。しかしそれだけ

なら、小さな喜びでしかありません。もしそれが他者の希望を挫き、他者に犠牲を強いるものであったとしたら、喜びでさえありません。人を不幸にして、自分だけが幸福になることはできないのです。「我も人もの仕合わせ」のために働いてこそ、働くことが大きな喜びとなり、生き甲斐にもなるのです。社会的な存在である人間は、人と協調し愛和してこそ、うれしいのです。

このことは誰もが強く思うところなのでしょう。多くの格言が残されています。

「幸福になりたいのなら、他人を喜ばせることを学びなさい」(英詩人 M・プリオール)

「幸福は人と分かち合えるようにつくられている」(仏劇作家 J・ラシーヌ)

「幸福は対抗から生まれることはなく、協調の中にこそある」(仏作家 A・ジイド)

「自らの幸福を望んでも、他人の幸福を望む心と一つにならない限り、それは何の役にも立たない」(英哲学者
バートランド・ラッセル)

「他人に幸福を分け与えることで、それと正比例して、自分の幸福も増加する」(英思想家 J・ベンサム)

では、私たちが幸福を追求する最初の場はどこでしょうか。そして究極的に幸福を共に分かち合う相手は誰でしょうか。

「王様であろうと庶民であろうと、自分の家庭に平和を見出すものがいちばん幸福な人間である」(ゲーテ)

「幸福は我が家の炉辺ろべたで成長する。他人の庭先で摘み取るものではない」(英劇作家 W・ジェロルド)

「愚か者は幸福がどこか遠いところにあると思いきこんでいる。利口者は幸福を足元で育てている」(米詩人、小説家 ジェームズ・オッペンハイム)

家庭愛和を目指して、今日一日の実践に邁進している人こそが幸福なのです。そして、愛和している家族は、一人ひとりが家庭愛和という同じ目標に向かって、自分の役割を果たそうとしています。

「幸福な家庭の顔はお互いに似通っているが、不幸な家庭の顔はそれぞれ異なっている」（露作家 L・N・トルストイ）

愛和した家族はお互いの信頼感で一樣に明るく輝き、自信に満ちています。一方、家族がバラバラな家庭では、家族一人ひとりがそれぞれ自分だけの欲望の充足を図って、多様に混乱しているのです。

しかし、家庭愛和が実現したからといって、私たちの実践は終わりではありません。

「世界全体が幸福にならないかぎりには、個人の幸福はありえない」（童話作家 宮沢賢治）

つまり、私たちの実践は世界全体が幸福になるまで続けられるのです。コロンブスがアメリカ大陸を発見しつづつあったときの幸福が、私たち実践者においては、永遠に続くことになるのです。

私たちが目指し、日々に実践していることの片鱗は、このように古今の識者の名言のうちに見出すことができます。しかしそれらはみな、私たちが目指し行なってきたことの一面でしかありません。

数々の古今の名言は、たとえば冬の天空にちりばめられた美しい星々なのです。そして、わが会が目指し行なう「人間が幸福に明るい生活のできる道」とは、誰もがその星の輝きに達することができる、星々をつないでかかる天の川なのです。

さて、最後にお尋ねします。あなたは倫理の実践が好きですか。あなたの日々の実践は喜びに満ちているでしょうか。もし、そうでないのなら、あなたの実践のどこかに翳りかげがあるのです。「照顧しやうご脚下こゝろ」、改善点を見極めて、明日からの実践に即反映させていたいただきたいと思えます。

「人間の幸福は決して神が握っているものではない。自分自身の中に、それを左右する鍵がある」（米思想家、

詩人 R・W・エマーソン）

仕合わせは、あなたの実践のうちにあるのです。